

# 博士論文の要旨

## 論文題目

### 二字漢字語のデータベースによる動詞化と形容詞化の日韓対照研究

朴善娟

#### 【論文内容の要旨】

現在、一般的に、韓国では固有文字のハングルが使われているが、語種の69%は漢字表記が可能な漢字語で構成されている (Lee, 2002)。韓国語に内在している漢字語は日本語と音韻的・意味的に類似しており、韓国語母語話者が日本語を学習するに当たっては有利な点となるが、同時に誤用が生じる原因ともなる。このような言語的背景から、従来、日本語と韓国語における二字漢字語の問題点として、形態的特徴による類似性や学習者にみられる誤用が生じる相違性については言及されている。にもかかわらず、日本語学習者および韓国語学習者を対象とする語彙学習のための日韓漢字語のデータベースはまだ見当たらない。

そこで本研究では、日本語と韓国語に存在する二字漢字語に着目し、両言語における同形漢字語に付加される語尾を集計した上で、計量的検討を行った。さらに、日本語と韓国語の同形語だけではなく、一方の言語のみに存在している漢字語も検討に入れ、それらの漢字語に付加する語尾の情報もデータ化した。そこから、両言語間の二字漢字語の形態的特徴の比較対照を可能とするデータベースを作成した。

第1章では、日韓両言語間の類似性のうち語彙的類似性は非常に高く、両方とも自国語の語種の中で漢字語が半数以上を占めていることを記述した。韓国語の場合は、使われている語彙の約7割は漢字に変換できる漢字語であるが、現在、韓国の日常生活で使用されている文字はハングルであるため、漢字を使うことはほとんどない。まず、韓国語の中で漢字語が使われている場面や、韓国での漢字語の使用を本研究の背景として紹介した。このような韓国語における漢字語の位相・漢字文化の背景・学校教育における漢字政策の状況を述べた。それにより、韓国語に内在している漢字語の使用現況が確認できた。両言語で多用されている二字漢字語の類似性や、漢字語に関わる語尾における形態的な類似性や相違性に着目し、本研究の成り立ちについて述べ、日韓両言語における二字漢字語のデータベースを作成することを目的とすることを述べた。

第2章では、韓国語の漢字語に関する先行研究を概観し、本研究の位置づけを行った。韓国語に

における漢字語の起源を探り、その漢字語が韓国語の固有語に同化され使用し続けている語彙性特徴の検討を行った。また、語根として使われる2字漢字語に付加する語尾について先行研究を検討した。具体的に、漢字語に付加される語尾において、動詞性・形容詞性を有している2字漢字語に関する語根のメカニズムを分析した研究を含め、それに付加される接尾辞の *-hada* や *-doeda*、*「-的」* の拡張した使用について検討した。それにより、漢字語が韓国語の言語体系に同化され、固有語との融合により成立していることが確認でき、これで、日韓両言語の漢字語における比較対照の根拠に成り立ち、両言語の2字漢字語をデータベース化することに意義があるということを確認した。

第3章では、韓国語の2字漢字語に *-hada* が付加することで動詞あるいは形容詞となるか、語彙性アスペクト特性を検討した。韓国語の *-hada* は日本語の *-suru* に対応しているが、韓国語 *-hada* は、動詞と形容詞の両方に使われるため、形態上では、その違いを判定することはできない。日本語2字漢字語の *-suru* 付加研究(松岡・玉岡・酒井, 2009; Tamaoka, Matsuoka, Sakai & Makioka, 2005) では、使用頻度の高い2,000語の漢字語の持つ「開始」「継続」「終結」「状態」の4つアスペクトから *-suru* 付加を予測し、「終結」のアスペクトだけで93.64% (802語中751語) を予測できることを示した。そこで、韓国語漢字語でも、語彙の持つ4種類の動作性アスペクトによって、動詞および形容詞としての *-hada* 付加を予測し、日本語の場合と比較することにした。

韓国語のナショナルコーパスとされる『21世紀世宗計画』をもとにして使用頻度の高い2,000語の漢字語を抽出した。これらの2,000語の総延べ頻度は1,481,916語で、コーパスの総語彙延べ頻度の26,329,643語に占める割合は5.63%である。また、コーパス全体の名詞の総延べ頻度は5,137,556語であり、それに占める割合は28.84%である。

『標準国語大辞典』を使用し、これら2,000語に *-hada* が付加されるかどうかを調べた。また、2,000語について「開始」「継続」「終結」「状態」のアスペクトの有無を判断した。アスペクトに関しては、著者がすべて判断したが、その判断の信頼性を測定するために、ランダムに200語を選び、韓国語母語話者に判定を依頼した。評定者間信頼係数(ピアソンの相関係数,  $n=200$ )は、開始が0.871、継続が0.827、終結が0.868、状態が0.815で、すべてのアスペクトで0.800を超えており、信頼性の高いことを確認した。

2,000語の韓国語の漢字語について *-hada* が付くかどうかを4種類のアスペクト(アスペクトが有る場合は1、無い場合は0)と使用頻度で予測する二項ロジスティック回帰分析を行った。動詞の分析の結果(Nagelkerke  $R^2=0.768$ )、「開始」( $p<0.01$ )、「継続」( $p<0.001$ )、「終結」( $p<0.001$ )、「状態」( $p<0.001$ )のすべてのアスペクトが有意な予測変数となった。しかし、使用頻度( $p=859$ , *n.s.*)は有意ではなかった。アスペクトの中で、最も高い予測力を示したのは「終結」のアスペクト(Wald=380.562)で、全動詞の843語の内687語を81.50%予測した。次に、「状態」のアスペクト(Wald=120.992)であり、253語を予測し30.01%であった。「開始」および「継続」も有意な予測変数ではあるが、いずれも多くが「終結」のアスペクトと重複するため、予測力は弱かった。

形容詞の分析の結果(Nagelkerke  $R^2=0.399$ )、「終結」( $p<0.01$ )と「状態」( $p<0.001$ )のアスペクトが有意な予測変数となり、「開始」( $p=0.728$ , *n.s.*)、「継続」( $p<0.075$ , *n.s.*)および使用頻度( $p=717$ , *n.s.*)は有

意ではなかった。「状態」のAspect(Wald=97.043)だけで、86語の内78語の90.70%を予測した。

結論として、「終結」のAspectの有無で動詞としての*-hada*付加が81.50%決まる。つまり、「±終結」が韓国語漢字語の*-hada*付加による動詞化を決めていると言えよう。一方、「状態」のAspectの有無で形容詞としての*-hada*付加が、90.70%が決まる。したがって、「±状態」が韓国語漢字語の*-hada*付加による動詞化を決めていると言えよう。ただし、2,000語の内、「状態」のAspectを持つ漢字語は386語あり、この中で86語の内78語を予測するので、20.21%の予測である。つまり、漢字語が「状態」のAspectを持っても、79.79%は形容詞としての*-hada*が付加されない。

「状態」のAspectを持つからといってすぐに形容詞とはならない。以上のように、韓国語漢字語の動詞としての*-hada*付加は、日本語の*-suru*付加と同様に(松岡ら, 2009; Tamaoka et al., 2005), 「±終結」の特性で決まっていた。また、形容詞としての*-hada*付加は、「±状態」の特性で決まっている。形容詞がある名詞の状態を修飾すると考えれば当然であろう。使用頻度は、動詞および形容詞としての*-hada*付加を予測しないので、漢字語としての頻度そのものは*-hada*付加に関係しないことが明らかになった。

第4章では、日本語と韓国語に共通する2字漢字語の統語的形態における類似性と相違性を計量的に検討した。2字漢字語の中でも、ある特定の語尾が付加されることにより、名詞が動詞化あるいは形容詞化する語で日韓いずれがある語があり、日韓両言語で動詞になる語でも、その漢字語が能動態か受動態かにより、日韓いずれが生じる語がある。また、形容詞の性質を持つ接尾辞「-的」の付加も調査対象に入れ、「-的」の出現傾向も検討した。その結果、調査対象語の1,872語のうち動詞は、日本語は609語(32.5%)で、韓国語は631語(33.7%)であった。一方、形容詞は、日本語は169語(9.0%)で、韓国語は127語(6.8%)であった。動詞と形容詞の両品詞を持っているのは、日本語は26語、韓国語は11語であった。また、動詞に関しては韓国語では受動態と能動態を分けて集計した。その結果、*-doeda*が付加可能なのは、631語のうち318語(50.4%)であった。これらの日韓両言語に現れる統語的形態の違いを明らかにすることで、母語からの干渉が起りやすい語彙とその特徴を挙げることにより、日本語学習をより効率的に進められるものとする。

第5章では、本研究での最終的な目的とする「日韓2字漢字語データベース」について、漢字語の抽出からデータベースの作成の過程や結果を述べた。データベースは3つの資料に分けて作成し、さらに漢字語の情報別に細分化した。「資料I」には、[シート1]「2,060語の日本語辞書調査」:日本語能力の中級のレベルに相当する語彙のうち2字漢字語(2,060語)の品詞情報が得られるようにした。[シート2]「1,872語の日韓同形2字漢字語」:日韓同形語の1872語に対して、日本語と韓国語の品詞の情報が比較できるように載せた。[シート3]「韓国語に無い漢字語188語」:韓国語には存在しない日本語独自の188語に対して品詞情報が参考できるように載せた。[シート4]「日韓同形語の品詞別割合」:日韓同形語で動詞や形容詞においてずれがある漢字語の項目が確認できるように載せた。[シート5]「日韓の形容詞性2字漢字語」:日韓同形語の1,872語の中で、日本語と韓国語の形容詞を比較できるようにした。「資料I」の作成を通して、日本語能力が中級レベルまで上がるにつれ、全体的に日韓での同形語の語数は、急増することが分かった。また、これらの同形語に

において、動詞は韓国語の方が多く形容詞は日本語の方が多くことが分かった。しかし、その差はそれほど大きくなはなかつた。

一方、「-的」の付加においては、日本語より韓国語の方が多かつた。特に、2級の語彙では日韓の差が他の項目より非常に大きかつた。「資料Ⅱ」には、〔シート1〕『旧試験』日本語2字漢字語3,698語：日本語能力上級レベルに相当する語彙のうち、2字漢字語(3,698語)を抽出し、その品詞情報と語尾の付加可否が得られるようにした。〔シート2〕「日韓同形2字漢字語3,419語」：3,698語のうち、日韓同形語3,419語の日本語の品詞と韓国語の品詞を対応させて比較できるように並べた。〔シート3〕「韓国語に無い漢字語279語」：3,698語のうち韓国語には存在しない漢字語を分け、その特徴や傾向が分かるようリスト化したものである。「資料Ⅱ」では、日本語学習において上級レベルに相当する2字漢字語を対象とした。従って、日本語の語彙学習における基本的な2字漢字語の品詞性が確認できるようにした。さらに、韓国語母語話者にとっては学習言語と母語との関係が明確に比較できるようにした。「資料Ⅱ」の作成を通じて、中級レベル(2級)から上級レベル(1級)に上がるにつれ、2字漢字語の語数そのものは増えていない(2級：1,666語、1級：1,638語)が、動詞として-suruが付加される語は増えていることが分かった(2級：534語/1,666語、1級：691語/1,638語)。このように初級から中級では2字漢字語の語彙数が急増したことに比べ、中級から上級の間ではそのような変動はなかつた。つまり、上級レベルでの2字漢字語の語彙性の特徴は2字漢字語そのものに内在している品詞性にあると考えられる。

最後に「資料Ⅲ」は韓国語の漢字語を中心に載せた。「資料Ⅲ」には、〔シート1〕「韓国語の高使用頻度2,000語」：韓国語の使用頻度が高い2,000語を抽出し、これらの語に「-hada/-doeda/-的」が付加するかどうかを載せた。〔シート2〕「韓国語母語話者判定と辞書記述」：韓国語の漢字語2,000語に対し、品詞の判別を、辞書の記述と2名の母語話者の判定から確認できるようにした。〔シート3〕「韓日同形2字漢字語1,930語」：2,000語のうち日本語にあるかどうかを調べた結果、1,930語が抽出された。この1,930語に対し、韓国語の語尾の付加と日本語の語尾の付加を比較できるように双方を対応して載せた。〔シート4〕「日本語に無い漢字語70語」：2,000語のうち、日本語には存在しない2字漢字語70語を載せた。「資料Ⅲ」の作成を通して、韓国語の2字漢字語のうち、動詞として使われる語の割合が非常に高いことが分かった(902語/2,000語)。それに比べ、形容詞として使われる語は少なく(103語/2,000語)、「-的」を付加する語が非常に多いことが明らかになった(389語/2,000語)。以上、3つの資料の作成から、日韓同形語における2字漢字語の比較対照を通して類似点や相違点が明確になった。本研究では、日韓両言語ともに、最も基本的である2字漢字語を選別し、調査の対象とした。一方の言語では使用頻度の高い語でも、もう一方では漢字語は存在しているが実際の使用率は低い語があるなど、両言語で使用の実態が異なっているという問題点も明らかになった。

第6章は総括である。韓国は、表面的にはハングルを使う環境であるが、漢字文化が浸透しており、漢字語の存在は、固有語と共に韓国語の語彙体系の中心である。そこで、日本語と韓国語の2字漢字語に着目し、両言語の類似点や相違点を比較対照研究の視点から明らかにし、日韓2字漢字

語のデータベースを作成した。特に日本語と韓国語において使用頻度が高い2字漢字語を対象とし、韓国語の2字漢字語の語彙性アスペクトを検討することで、漢字語の品詞性による語尾の予測ができることが明確になり(3章)、両言語の2字漢字語の形態的要素を計量的に検討し、日韓間の比較対照の検討を行った(4章)。これにより、両言語における2字漢字語の品詞性による語尾のずれや、両言語内の品詞性の特徴を計量的手法で検討した。

日本語と韓国語における2字漢字語のうち、日韓同形語の割合は90%以上にのぼっていた。しかし、これら漢字語には日本語と韓国語の統語的構造の問題や使用頻度の違いが関わっており、比較対照するには多くの制約が存在している。本研究で提案した日韓2字漢字語データベースの作成を通して、両言語の漢字語の特性や文中で使われるための語尾体系のずれが明らかになった。また、日韓同形2字漢字語において、動詞と形容詞が単独の品詞より重複して使われるのは、韓国語の方が多くなっていた。このことから、日本語より韓国語の学習における漢字語の統合的・形態的要素は多様であり、そのことが、両言語学習者に混乱を感じさせているのではないかと考えられる。

最後に、本研究で試みた両言語における2字漢字語のデータベースの作成には、いまだ課題が残っている。

まず、同音異義語のうち、データベースに該当する漢字語の抽出や多義語の選択をどこまで取り入れるかを、データ化する目的に沿って客観的な基準を設定する必要がある。本研究のデータベースを作成する上で突き当たった問題は、多義語の取り扱いと、同音異義語が2語以上の場合の使用頻度の判断であった。本論では、前者において意味的な問題は検討の範囲としていないため、一般的に使われている意味であるかどうかは問わず、使われていない意味の情報も全て取り入れた。日韓両言語において同音異義語の2字漢字語が、どのような形態的要素を持った機能範疇に入り、どのような語彙範疇まで拡張することができるのかを、語彙学習の視点から検討を行うべきであると考えられる。

次に、漢字語を BCCWJ から用例を検索し、データベースに取り入れる場合、洩れた漢字語に関しての特定の指標を設定することが望ましい。本研究では、漢字語の用例の検索において、日韓両言語ともコーパスによる検索用例の頻度では非常に違いが生じた。両言語の学習において、漢字語の使用頻度を判断するには、特定の語彙指導における目的に沿った基準や指標が必要であると考えられる。コーパスによる検索例を利用する際は、特定の指標の設定が必要であると考えられる。今後は、研究課題に沿った語彙の指標を設定し、特定する語彙分野の範囲を決めて進めていきたい。

最後に、漢字語に内在している語彙的性質による動詞化および形容詞化の予測力を、言語事実に一般化するためには、漢字からなる語構成を考慮する戦略が必要である。漢字語を全てハングル表記で使用することで誤解を生じかねない同音異義語に関しては、括弧を付け漢字を表記する二重の表記法を伴う場合もある。このように韓国では、表面的にはハングル環境の中にありながら、漢字語は韓国語に浸透している。そうした語彙体系を持つ韓国人日本語学習者にとっては、図らずも日本語学習を通して自国の語彙を改めて意識化することになり、漢字語の持つさまざまな特徴を対比させながら、韓国語内の漢字語の語彙性アスペクトが判断できるということは、漢字語

の意味の把握ができていたとも言えよう。

現在、国字としてハングルを使用している韓国内では、漢字書字の認識が甘いということは確かである。しかし、漢字語の構成を把握するためには、まずは、漢字語を構成する各漢字の意味そのものを把握しなければならないことであろう。漢字語であることを認識することによって、漢字を意識することになり、さらに漢字一つ一つの概念に繋がるのではないかと考え、これらを証明するにはさらなる検証が必要であると考えられる。

漢字語の統語的形態の特徴は、韓国語および日本語の各言語体系の下、特に、各言語の統語現象や言語文化を反映したことに由る。言語教育の観点から見れば、学習者に対してその相違点を明示化することがきわめて重要である。しかしながら、韓国語学習者および日本語学習者にとって、両言語における漢字語の類似点あるいは相違点を明示化するためには、上記のような各言語の統語現象や言語文化を反映した言語的特徴が考慮された基礎データの作成など、課題が数多く残っている。特に、語彙教育、語彙学習のための資料は十分ではなく、それらが活用できる資料の内容の範囲も限られている。今後は、両言語における言語的特徴を考慮した上で漢字語の特性を、さらに意味的な用法も取り入れるなど対象範囲を広げ、第2言語としての漢字語学習を支援するための基礎データを提供していきたい。

終わりに、本研究で作成した日韓2字漢字語のデータベースが、両言語の教育現場における語彙学習に貢献できることを願っている。そのためにも、今後の語彙学習において、本データベースがより効率的に使用してもらうために、体系的な補修作業や、資料に対する検討は引き続き、行っていく予定である。

## 引用文献

- 이운영(LeeUnYeong) (2002) 『『표준국어대사전』 연구분석 (『標準国語大辞典』 研究分析)』 국립국어연구원.
- 松岡知津子・玉岡賀津雄・酒井弘 (2009) 「アスペクトによる漢字二字熟語のサ変複合動詞化に対する予測」(由本陽子・岸本秀樹 編)『語彙の意味と文法』; 121-137, くろしお出版
- Tamaoka, K., Matsuoka, C., Sakai, H., & Makioka, S. (2005). Predicting attachment of the light verb-sure to Japanese two-kanji compound words using four aspects. *Glottometrics*, 10, 73-81.